

## 開発経済学（水ノ上） 課題図書リスト（順不同）

2013/4/19

以下に 31 冊を挙げています（順不同）。専門書はほとんどないし、あっても入門レベルなのでどれも読みやすいのではないかと思います。開発経済学と直接は関係ない本もありますが、いずれも途上国の現状や問題点について理解を深めるきっかけになるとと思います。

特にオススメのものには！印が、大学の図書館所蔵のものには★印が付いています。（★は今回新たに追加されたもの。）

### 開発経済学

**J・サックス(2006)『貧困の終焉』早川書房 ! ★**

エコノミストとして途上国で政策を作成してきた経験から、我々は必ず貧困を撲滅できること、そのために我々がなすべきことについて書かれています。少々長いけれど、ぜひ読んで欲しい。

**ウィリアム・イースタリー(2003)『エコノミスト南の貧困と闘う』東洋経済新報社 ★**

上の『貧困の終焉』と同様の開発の現場を知るエコノミストの本です。やや専門的だが読みやすい。

**ポール・コリアー(2008)『最底辺の 10 億人』日経BP**

アフリカの多くの国々は貧困という罠に足をはさまれ、もがいているように見えます。それらの国々を成長から遠ざける 4 つの罠について理解することができます。

**ムケシュ・エスワラン, アショク・コトワル(2000)『なぜ貧困はなくなるのか』日本評論社**

副題は「開発経済学入門」。インドを題材に、開発経済学の考える経済発展過程を理解することができます。

### グローバリゼーション

**トーマス・フリードマン(2006)『フラット化する世界①②』日本経済新聞社 ★!**

我々が住む世界がこれからどういう方向に進むのかを示した世界的ベストセラー。世界のフラット化が途上国に住む人々にどのような影響を与えるかも示唆しています。

**J・E・スティグリッツ(2002)『世界を不幸にしたグローバリズムの正体』徳間書店 ★**

**—(2006)『世界に格差をバラ撒いたグローバリズムを正す』徳間書店 ★**

情報の非対称性でも有名なノーベル賞経済学者スティグリッツ氏が、先進国主導による

不平等なグローバリズムを批判し、あるべきグローバリズムの姿を模索しています。

**ピエトラ・リボリ(2007)『あなたのTシャツはどこから来たのか?』東洋経済新報社 ★**

Tシャツ(というより繊維産業)を例に、グローバリズムを考察しており、プロダクト・ライフサイクル論が実感を持って理解できます。

### マイクロ・ファイナンス

**ムハマド・ユヌス(1998)『ムハマド・ユヌス自伝』早川書房 ★**

—(2008)『貧困のない世界を創る』早川書房

2006年にノーベル平和賞を受賞したグラミン銀行総裁ムハマド・ユヌス氏の自伝。画期的な金融モデルであるマイクロ・ファイナンスを世界に広めた人物として有名です。

**フィルダー直子(2005)『入門マイクロファイナンス』ダイヤモンド社 ★**

その名の通り、マイクロ・ファイナンスの入門書。わかりやすいが、中身も薄いかな?

**坪井ひろみ(2006)『グラミン銀行を知っていますか』東洋経済新報社 ★**

同じくマイクロ・ファイナンスについて。

**菅正広(2008)『マイクロファイナンスのすすめ』東洋経済新報社 ★**

バングラデシュで産声をあげ、世界中に広まったマイクロ・ファイナンスはなぜ日本で普及しないのか。マイクロ・ファイナンスを扱う本は増えてきましたが、日本の貧困問題について言及している本は貴重です。

### 途上国の現状

**NHK スペシャル取材班編(2007)『インドの衝撃』文藝春秋 ★!**

10億人を超える人口を持つ大国の台頭はまさに「衝撃」です。

**ディーパ・ナラヤン(2002)『貧しい人々の声』世界銀行 ★**

50ヶ国以上の4万人以上もの貧しい人々の声を集めて作った貧困研究調査。

**伊勢崎賢治(2004)『武装解除 紛争屋が見た世界』講談社新書 ★**

世界の紛争の現場にいた人だからわかる内戦・民兵・武装解除の現実。著者はテレビでも見かけますね。

**トレーシー・キダー(2004)『国境を越えた医師』小学館プロダクション ★**

貧困層への基本医療サービスの必要性を訴えたポール・ファーマーの伝記。

**ロバート・ゲスト(2008)『アフリカ 苦悩する大陸』東洋経済新報社 ★!**

ジャーナリストが長年に渡る経験を基に、「アフリカの発展を妨げているのは誰か？」を考察しています。アフリカの一般の人々がどのように苦しめられ、絶望的な環境に置かれているかがよくわかります。

**フィリップ ゴーレイヴィッチ (2003)『ジェノサイドの丘—ルワンダ虐殺の隠された真実』WAVE 出版 ★**

本の帯には「1994年、アフリカの真ん中で100万人が殺された。だが、世界の人々は、少しも気にしなかった。」という一文が…。これがすべてを物語っています。ルワンダでの虐殺は映画「ホテル・ルワンダ」にもなりました。(映画「ホテル・ルワンダ」も図書館にあります)

**松本仁一「アフリカ・レポート—壊れる国, 生きる人々」岩波書店 !**

初回に取り上げたジンバブエをはじめとして、成長できないアフリカの国々についてのレポート。

**ヴィジャイ・マハジャン(2009)「アフリカ 動きだす9億人市場」英知出版 ★**

長く続く貧困に苦しめられてきたアフリカを、9億人を抱える巨大市場と捉え、具体的事例とともにビジネスの舞台としてのアフリカの魅力について解説している。

## 社会企業家

**シルヴァン・ダニエル&マチュー・ルルー『未来を変える80人 僕らが出会った社会起業家』日経BP社 ★!**

開発経済学とは関連が薄いけれど、「世界をより良いものにしたい」という点ではこの本に登場する人たちと開発経済学の目指す方向は同じだと思います。ムハマド・ユヌス氏も登場します。ぜひぜひ学生に読んで欲しい1冊。楽しみながら読めるはずです。進路に悩む学生にもおすすめ。

**ジョン・エルキントン, パメラ・ハーティガン「クレイジーパワー」英治出版 ★**

数多くの社会起業家へのインタビューをもとに、社会起業家のビジネスモデルについて解説している。

**スチュアート・ハート「未来をつくる資本主義」英治出版 ★**

いわゆる BoP (Bottom of Pyramid : 貧困層) ビジネスによって、いかにして社会の様々な問題が解決されるかを解説している。

## その他

### ジャレド・ダイヤモンド(2000)『銃・病原菌・鉄』草思社 ★!

開発経済学とは直接関係ありませんが、超長期に渡る文明の発展について考察した名著。地理的条件が発展に影響を与えるという主張には驚くかもしれません。

### 西水美恵子(2003)『貧困に立ち向かう仕事』明石書店 ★

世界銀行での仕事の内容ややりがいを女性という視点から説明。同じく世界銀行で働く日本人女性の体験談も。

### 野田直人(2000)『開発フィールドワーカー』築地書館 ★

開発の現場で働く人による実践的フィールドワークの入門書。参加型開発について理解も深まる。

### デイヴィッド・ランサム(2004)『フェア・トレードとは何か?』青土社 ★

先進国の企業が途上国の労働者を搾取するのではなく、生産者と消費者が直接、その名の通りフェアな（公正な）取引をすることで不平等を是正しようという試みを、現地からのレポートを交えて紹介している。

### レオン・ヘッサー(2009)「“緑の革命”を起こした不屈の農学者ノーマン・ボーローグ」悠書館 ★

後に“緑の革命”と呼ばれた発明により、世界で飢餓で苦しむ数億人の命を救った農学者の伝記。

### ブラッドリー・R・シラー(2010)『貧困と差別の経済学』ピアソン桐原

アメリカの貧困と差別についての定評のあるテキストだが、途上国についても章が設けられている。

### アリグザンダー・アーウィン他(2005)『グローバル・エイズ 途上国における病の拡大と先進国の課題』明石書店

やや古いですが、HAV/AIDS についての俗説を正し、基礎的な情報を得ることができる。貧困国における AIDS 治療についても学ぶことができる。